

佐藤佐太郎

短歌を味わう二ころ

冬をすぎ、
一目くづか
にて目まよ
をとりを
製火花の
かき目がす



角川選書 14

莊嚴で独自の歌境を拓いた著者の晩年のエッセイを収めた。各地の風物や四季おりおりの草木のこと、あるいは人麿・鷗外・荷風・茂吉など先人や杜甫・蘇東坡・陸游など唐宋の詩人についてなど、佐太郎世界の秘奥が縦横無礙に語られている。「作歌は見ることに尽きる」と言い切った著者のするどい眼が、各話ひとつひとつに新しい発見をして、おのずから短歌の真隨にふれ、詩歌鑑賞

短歌を味わうこころ

昭和六十三年八月八日 初版発行

著者——佐藤佐太郎

©Satarō Satō 1988

Printed in Japan



発行者——角川春樹 発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三・三三 郵便番号103 振替東京三一九五〇八

電話 営業〇三七八五三 編集〇三八二七八五

装幀者——杉浦康平 協力——赤崎正一

印刷所——新興印刷株式会社 外装印刷——旭印刷株式会社

製本所——株式会社宮田製本所

定価はカバーに明記してあります

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN4-04-703014-7 C0395

佐藤佐太郎
短歌を味わうところ

有る時は幼き
ふれを争ひ
かきと目つ
と踊るてがな
しむ



短歌を味わうころ

佐藤佐太郎

目次

第一章 泛春池

泛春池	二〇	常照皇寺の桜	四
「鷗外」の誤植	三	良寛の歌一首	四
「柿本人麿」の頃	三五	月の歌	四
永井荷風先生	三〇	和倉温泉	五
秘密な言葉の力	三四	雁鼎々	五
吉野秀雄さんのこと	三五	檜の若葉	五
はこねうつぎ	三六	杜詩	五
大台が原	三九	「旅順入城式」の頃	六
蓮の花	四〇	尾駮沼	六
米原の石標	四四		

第二章 樟若葉の音

樟若葉の音	六	賢島	六
ねんごろな語気	七	いまだ美しき歌	六
ニセモノ	七	惠州行	一〇
新冬	八	小林勇氏	一〇
得喪良細事	八	茂吉選集讚	一〇
尽きない味わい	八	一生手離し得ない本	一〇
茂吉の歌一首	八	潔白の精神で	一〇
明治天皇御製	八	衰老日常	一〇
左千夫の歌	七	「写生」のこと	一三
牛の歌	八	写生	一三
すすき	八	桜並木	一五
鳴子峡	三	作歌真後語	一七
蘇東坡讚	四		

第三章 安房にて

安房にて	一三〇	落齒	一三〇
重油の汚れ	一三三	銅印	一三〇
『枇杷の花』のこと	一三三	偽作	一三〇
テープレコーダー	一三五	硯	一三五
濡れ石	一三七	「あそび」について	一三五
七月二十一日	一三六	幼子	一三七
還暦	一三〇	詩簡淡	一三五
一時の誤	一三三	眼花	一三六
老境	一三四	陸放翁	一三六
藜の実	一三六	海雲	一三六
露の臺	一三六	初夏	一三六
作歌と生活	一三九	蟹の子	一三七
ただ李を見る	一四一	理髪	一三七
樟の若葉	一四三		

第四章 移居

移居	一七六	小泉信三先生	三〇九
『しろたへ』のこと	一七六	『萬軍』のこと	三三三
茂吉の評言	一八〇	紅梅	三六六
郷里	一八三	師弟	三八八
愛読書	一八六	遷宮	三三〇
石	一八八	雁の歌	三三三
虚子の句	一九〇	発表形式	三三五
庭	一九三	龍安寺の歌	三三七
亀	一九五	薩摩慶治氏	三三九
羽黒南谷	一九七	妻還曆	三三三
蟬	二〇〇	路傍の標	三三四
鐘の音	二〇三	申す	三三六
新年の歌	二〇四	遊び	三三八
老境	二〇七	毛筆の字	三四〇

第五章 自歌備忘

浜木綿	二四	月満ちて	二五
那智の滝	二四	新年の歌	二五
昼顔	二四	近作二首	二五
鳥雀	二四	禁煙	二六
「水辺」自註	二四	自歌備忘	二六
篋の歌	二五		

付記

二四

第一章 泛春池

泛春池
はんしゆんち

京都へ行ったのは四月十六日。今年は季節のめぐりがおそく、嵯峨野はようやく花のさかりだった。

大覚寺に着いて、舟のしたくを待つあいだ池のめぐりがある。ここは平安朝のはじめ、桓武天皇の皇子嵯峨天皇が離宮をいとなんだところである。その林泉のなごりは池のほとりにのこっているといわれる。天皇はここにしばしば文人を集めて雅宴をひらいた。

『文華秀麗集』に「春日嵯峨山院」という嵯峨天皇の詩がある。弘仁七年二月二十七日の作ともわれるが、太陽曆にあてれば三月末でもあろうか。詩は、

氣序如今老いんとし、嵯峨の山院暖光遅し。

峯雲ゆくりかに梁棟を侵し、溪水尋常に簾帷に対かふ。

莓苔踏破す年を経し髪、楊柳いまだ懸けず月を伸ぶる眉。

此の地幽閑にして人事少れなり、唯余すは風動ぎて暮猿悲しぶのみ（『日本古典文学大系』小島

憲之氏訓読による）

というので、まだ柳も芽を出したばかりの早春のおもむきである。「文華秀麗集」には同じ日の作とおもわれる「春日侍嵯峨山院」という皇太弟（淳和天皇）の詩もある。なかに「花の香近くに得たり窓を抱く梅」という句がある。桜にはまだ早い季節であつたし、池のことはなにも言っていない。

岸の木々にまじつてところどころ桜がある。山桜は淡赭たんしゃの葉と純白の花といちどに開いている。これは平安朝から何代目かの子孫にあたるのだらう。そういうことにきめて、仰いでいると、花はありなしの風にかすかにゆらいでいた。ときどきやや強く風が吹き、樟かは音をたてて古葉をおとした。しかし桜は一片も散らない。いま咲いたばかりというみずみずしさであつた。

ひろい池のおもては平均に水をたたえて春の日に光っている。岸寄りには青い葦の芽がまばらに水をぬきでて萌えている。そのあいだに五寸ほどの鮒の死骸がただよっているのは、お産をしてからだのよわつた鮒が気温の変化にあたつたのもあろうか。対岸はひくい土手で、横雲のように桜がつづいている。ときどき花の下を団体の人が一列によぎつてゆくのが見えたりした。

いよいよ舟に乗りこんで歌会がはじまつた。朱毛氈しゅもうせんをしいた舟には酒と折詰の弁当とが用意されている。折をひらき、杯をあげて、歌が主でもない、花が主でもない、酒が主でもない、「文字の飲い」をたのしむので、今日ここに遊ぶのは私たち夫妻と歌の仲間十数人、どれも親しい顔だ。春の光を分けあい、影をならべて一日の飲をつくすのである。

「文字の飲」という言葉は、唐の韓退之かんたいしの詩でおぼえたのである。韓退之の「醉贈張秘書」（醉

いて張秘書に贈る」という詩は、自分は生来あまり酒をこのまないが、今日君の家に来て、酒を出させて自分も飲み君にもすすめる。この座上の客はみな文芸の士で、君の詩は春天の雲のように風情があるし、孟郊の詩は天から降る花のように奇香がある。張籍の詩は枯淡で鷄群の一鶴のようである。甥の阿買は書をよくするから出来た詩を浄書させられる。酒を飲むのは詩を作るのに酔つて興がわくからである。酒の味は冷ややかにしみとおるようであるし、酒の気は匂うようであつて、浩然と諧謔談笑している。これが飲酒のほんとうの味だ。長安の富人たちは皿にさまざまの肴をならべ、美妓をはべらせていたずらに酔うだけで風流な文字の飲ということを知らない。いまわれらは酒の肴もえらばずあつさりしているが、詩を作ればたいしたものだ。至上の宝である珠は彫琢を待たずというが、ことさらに苦心したものでなくとも自得の妙は即ち酔中に得た文字の真趣である。今の世は泰平に向かつて辛い事もないから、このようにして朝夕を送りたいものである。こういうことを詠んでいる。なかに、

長安の衆富兒、盤饌、羶葷をつらぬ。

文字の飲を解せず、ただ能く紅裙に酔ふ。
という四句がある。

私もようやく六十年の生日を過ぎたから、酒が好きだといつてもただがぶがぶ飲むだけではなく、静かに楽しむことをおぼえなければなるまい。そればかりではない。この韓退之の詩には、誰も詩が立派だということを除けば、今日の楽しみを言いあてたようなところがある。あたたかい春の雲、

天から降る花の香、つめたい酒、これでもしな歌が一つでも二つでも出来たらいいが、それは期待してはならない。ほんとうの歌は孤独から生まれるものだから、遊びはどこまでも遊びとして割りきるのが私の態度である。

舟はおもむろに進んで、土手の花の方に近づいてゆく。いままでの嵯峨御陵あたりの山影がうしろにさがって、嵐山あたりの山影が水面にある。たえず雲のながれている空から水に反響するように鳥の声がきこえてくる。沖のひとところに花片がかたまつて浮いていた。散るとも見えないのに、やはりすこしずつ散るものがある、それが水のかすかな流れにただよっている。仲間たちは談笑することもなく、飲むものは飲み食うものは食い、そして歌を考えている。

水があればそこに舟を浮かべるといふことはどういふことであらうか。水のなかに身をおくといふことで、もっとも水に親しむゆえんであるかも知れない。白楽天は平安朝の文人に愛読された詩人だが、白楽天に、「泛春池」(春池にかぶ)と題した詩がある。すこし長いから後半を引いてみよう。

波上一葉舟

波上一葉の舟

舟中一樽酒

舟中一樽の酒。

酒開舟不_レ繫

酒開いて舟つな_がず、

去去隨_三所偶_一

去々所偶に_{きま}随_よう。

或逸蒲浦前

或泊桃島後

未撥落杯花

低衝拂面柳

半酣迷所在

倚榜兀回首

不知此何處

復是人寰否

誰知始疏鑿

幾主相伝受

楊家去云遠

田氏將非久

天與愛水人

終焉落吾手

或は蒲浦の前をめぐり、

或は桃島の後に泊す。

未だ杯に落つる花をはらわず、

低れて面を払う柳を衝く。

半酣所在に迷い、

榜に倚り兀として首を回らす。

知らず此れ何の処ぞ。

復是れ人寰なりや否や。

誰か知らん始めて疏鑿し、

幾主か相伝受する。

楊家去りてここに遠し、

田氏將久しきに非ず。

天水を愛する人に与え、

終焉として吾が手に落つ。

白楽天は自分の邸宅にある池に舟をうかべたのであった。池は煙波をただよわすこと六、七畝、鏡面のようである。主人（楽天）は、清い波をけがすことをおそれて塵のついた冠をぬいで舟に乗

る。酒をのせ、ゆくえ定めずこぎ出す。水草の前をめぐり、桃の咲く島に泊り、花片が杯に落ちてはらわず、頭をさげて柳をくぐり、半ば酔い、所在に迷って、首を回らしてあたりを見たりする。ほとんど人間界に居るとも思われない楽しさである。この池を掘ったのは誰か、持主も幾度かかわって、今わが所有となった。天が水を愛する人に与えたのである。と、詩は言っている。「煙波六、七畝」、三百坪ほどもあるかという池だが、自分の池に遊ぶ楽しさは格別であつたろう。楽天の池にくらべたらここはその何倍も広いが、条件がちがうし、舟にいらるのは、どやどやと靴をぬぎずて、あぐらをかいている野人である。しかし水にかぶ楽しさはわれらにもあるといつていい。水の光は花にうつり、花の光は水にうつり、その明るさのなかに何の抵抗もなくからだがかんである。水をわたる風には草の匂いがある。

ようやくみんなの歌が出そろつた。それを幹事が一首一首読みあげる。

かがよへる春のひかりに水に浮く桜の花片かへん遠くより見ゆ (佐藤志満)

和らぎて池にただよふ花あかりまた水あかりその中を行く (堀山庄次)

花のした屋形の船にのりてゆくかかるとつに今あり吾は (後藤田恵以子)

池のうへ舟うつりゆきある時は桜花さくひかりにひたる (井上一彦)

大沢の池にいくばく風ありて舟より見れば桜ふかる (加古敬子)